ゼロスペック社製・残量自動感知システム

灯油配送を大幅効率化

第一石油（岩手・久慈市）

人手不足に威力発揮

冬場に灯油配送員の確保が年々難しくなる中、顧客の灯油ホームタンク残量を自動感知するシステムが人手不足対策に威力を発揮している。配送業務の大幅な効率化につながり、少人数での配送が可能になるからだ。

顧客のタンクに配備されたセンサー付きキャップについて説明する畑田専務

昨冬まで社員2人、季節従業員2人の4人体制で冬場の燃料配送を続けてきた岩手県久慈市の第一石油（兼田尚広社長・ENEOS系）。残量自動感知システムの対象顧客が顧客全体の8割に達した今冬は、社員2人体制で乗り切ることができた。

配送事業を取り仕切る畑田正一専務は「季節従業員が高齢化し、代わる人材も見つからない中、担当員を半分にしても乗り切れたのは大きい」と話す。

同社が導入したのはゼロスペック社製の感知システム。ホームタンクの給油口のキャップに残量を自動計測してデータを無線で飛ばせるセンサーを取り付ける。データは同社のパソコンでリアルタイムに確認できるため、お任せ給油での配送回数を大幅に削減できる仕組み。

従来は残量半分ほどで出動していたが、担当者の勘に頼っていたため実際は70％ほど残っていることもあった。残量が正確にわかる現在は、残量が40％を切った段階で出動することにしたため配送回数は大幅に減った。

同社は2020年度の冬、久慈市と手を組み、経済産業省の次世代燃料供給体制確立に向けた技術開発・実証事業に応募して採択され、市中心部の民家100戸に導入した。

実証結果で効果が見られ、センサー設置の補助制度が継続されたことから年々対象顧客を増やし、今冬は300戸ほどに。当初は電波のカバー範囲が市内の57％にとどまったが、携帯電話のアンテナを活用したLTE方式に切り替えられた今冬からはほぼ全域をカバーできるようになった。

畑田専務は「従来はタンクの残量メモリがゼロに近づいたとして緊急配送を依頼してくる客もいたが、システムへの信頼が高まった今はなくなった。担当者が安心して休暇を取れる効果も大きい」と話している。